

ヒュームの因果論

— 知識論と形而上学の「大変革」 —

秋 元 ひろと

Hume's Theory of Causation: A 'Revolution' in Epistemology and Metaphysics

Hiroto AKIMOTO

Abstract

Hume describes his *Treaties* as an achievement that would bring about revolutionary changes in philosophy. In this paper, I focus on his theory of causation and show that it is an attempt to accomplish a revolution not only in epistemology but also in metaphysics. In opposition to the traditional conceptual setting, which locates the concept of causation in the domain of knowledge, Hume locates it in the domain of probability. In this sense, his theory of causation is a revolution in epistemology. Rejecting every existing account of causal power, Aristotelian, Scholastic, and Cartesian, all of which take causal power to reside in some objects or other, Hume maintains that it resides in the mind that, having observed the constant conjunction between two kinds of objects, passes from the idea of one object to its usual attendant. In this sense, his theory of causation is a revolution in metaphysics.

はじめに

いまだ 20 代のヒュームが世に問うた野心作、それが『人間本性論』である。^[1] 同書の「序論」で彼は、「諸学の不完全な現状」(THN, Intro. 2) について語った上で、「人間本性」の解明を目指す自身の試みについてつぎのように述べる。

「それゆえ、人間本性の諸原理の解明を提起することにおいてわれわれが目論むのは、諸学の完全な体系をほとんどまったく新たな基礎の上に、しかもそれらを安全に支え得る唯一の基礎の上に建てることなのである。」(THN, Intro. 6)

また『本性論』の出版後まもなく書かれた手紙には、同書で彼が論じた主題について述べたつぎのような言葉がある。

「私の諸原理は、この主題に関する一般の意見のすべてと遠くかけ離れているので、もしそれらが原理としての地位を得ることになれば、それらは哲学の様相を一変させるでしょう。ただ、ご存知のように、この種の大変革は容易に成し遂げられるものではありません。」(New Letters, 3)^[2]

ところで、ヒュームが『本性論』で企てた哲学の「大変革 revolution」のなかでも因果論が中心的な位置を占めるものであったことは間違いない。『人間本性論摘要』にその証拠が見出される。『摘要』は、『本性論』が「曖昧で理解が困難である」(Abs, Preface 2) と評されたことをうけてヒュームが著した

小冊子で、同書の「主要な議論」を簡略に解説したものである。^[3]そして、「われわれは、主として扱う範囲を、原因と結果に基づくわれわれの推論について彼が行った解明にかぎりたい」(Abs, 4)といわれるとおり、主要な議論のなかでもヒュームがとくに多くの紙数を割いて解説するのは因果論なのである。

それでは、ヒュームの因果論はいかなる意味で哲学の「大変革」であったのか。本稿ではその意味を、知識論の「大変革」ならびに形而上学の「大変革」という二つの側面から明らかにしてみたい。

1. 知識と蓋然性

ヒュームが因果論を展開するのは、『本性論』にそくしていえば、第1巻「知性について」の第3部「知識と蓋然性について」においてである。第1巻の主題をヒュームは「論理学」とも呼んでおり、その目的は「われわれの推論機能の諸原理と諸作用、ならびにわれわれがもつ諸観念の本性を解明すること」(THN, Intro. 5)にあるという。しかし、論理学ということでヒュームが意味するのは、演繹的な論証を中心とする狭義の論理学ではない。この点を理解するためにも「知識 knowledge」と「蓋然性 probability」の区別を簡単に説明しておこう。

この区別に重なる、「観念間の関係 relations of ideas」と「事実 matters of fact」の区別から見ていくことにする。^[4] 実例にそくして説明するのが分かりやすいだろう。

「直角三角形の斜辺の二乗は、他の二辺の二乗〔の和〕に等しい。」(EHU, 4.1)

「太陽は明日昇るだろう。」(EHU, 4.2)

前者が観念間の関係を表現する命題の、後者が事実を表現する命題の例である。前者の命題は必然的に真である。その否定は背理ないし矛盾を含み、したがって成立しえないからである。それに対して後者の命題は、それが真であるとしても、必然的にではなく偶然的に真である。その否定は矛盾を含まず、したがって成立しうるからである。そして、この区別に対応するのが、知識と蓋然性の区別である。すなわち、「知識」とは観念間の関係を対象として成立するもの、「蓋然性」とは事実を対象として成立するものである。また、知識の成立（知識を表現する命題の真理）は、「直観 intuition」もしくは「論証的推論 demonstrative reasoning」によって確かめられることである。それに対して蓋然性の成立（蓋然性を表現する命題の真理）は、それが現在の直接知覚を超える事実に関するものであるかぎり、「蓋然的推論 probable reasoning」すなわち「原因ないし結果からの推論 reasoning from cause or effect」によって確かめられることである。つまり、ヒュームが推論というとき、それは論証的推論だけでなく蓋然的推論も含むのであって、「われわれの推論機能の諸原理と諸作用、ならびにわれわれがもつ諸観念の本性を解明する」(THN, Intro. 5) 彼の論理学は、蓋然性も含めた広義の知識一般を論じるものであり、ほぼ知識論に相当する内容を含むものなのである。^[5]

さてあらためて確認すれば、『本性論』第1巻第3部の主題は知識と蓋然性である。ところが、二つの主題の扱い方には著しい不均衡が見られる。というのも、第3部を構成する全部で16の節のうち知識を主題とするのは第1節のみで、残りの15の節はすべて蓋然性ないしそれに関係する事柄を主題としているからである。『摘要』を見ると、そうした取り扱いがきわめて意図的に行われたものであることが分かる。

ヒュームは、論証知に研究関心を集中して蓋然性の研究を蔑にしてきたこと、この点に「従来の論理学体系の欠陥」(Abs, 4)を見出した哲学者としてライプニッツの名前をあげる。そして、ライプニッ

ツによる批判の対象にはロックの『人間知性論』、マルブランシュの『真理探究論』、アルノーとニコルの『思考法』（いわゆるポール・ロワイヤル『論理学』）が含まれていたとした上で、「『人間本性論』の著者は、これらの哲学者たちの欠陥に気づいていたように思われ、可能なかぎりその欠陥を埋めることに努めた」（ibid.）のだと述べる。つまり、著しい不均衡を抱えていたのはむしろ従来の論理学のほうであって、彼は、あえて蓋然性に研究関心を集中することによってその不均衡をたどそうとしたというわけである。

そして蓋然性をめぐる考察は、実質的には因果論を中心として展開される。つまり、ヒュームの因果論は論理学すなわち知識論の「大変革」を目指すものだったのである。

2. 知識論の「大変革」

ヒュームの因果論は、いかなる意味で知識論の「大変革」であったのか。この問題に関係する優れた研究として、蓋然性の概念史を扱ったハッキングの著書『確率の出現』*The Emergence of Probability* がある。^[6] そこで本節では、同書のうちでも上の問題にとくに関係する部分（第3章から第5章と、第18章）の概要を紹介しながら考察を進めることにする。^[7]

ハッキングの概念史記述は、中世における「知識 *scientia, knowledge*」と「意見 *opinio, opinion*」の区別から始まる。中世の知識論では、知識とは、普遍性と必然性をもつ真理の認知のことで、原理的命題と、原理的命題から演繹的に論証される命題とが表す真理、これがそのような真理の領域を構成するとされた。それに対して、知識とは区別され、それよりも価値的に劣ると見なされたのが意見と呼ばれる認知である。そして、意見のもつ特徴とされたのが蓋然性である。ただし、「蓋然性 *probabilitas*」の意味については注意を要する。その語は、現代のわれわれが理解するものとはまったく異なる意味をもっていたからである。現代の理解では、「蓋然性は、仮説とそれを支持する証拠とのあいだの関係である」（Hacking 2006, 31）。この理解に従えば、「意見は、それを支持する十分な理由があるとき、つまり、それが証拠によって十分に支持されるときに蓋然的である」（Hacking 2006, 22）といわれる。ところが中世の理解では、「『蓋然性』という語の基本的な意味は、証拠に基づく支持ではなく尊敬を集めている人々による支持である」（Hacking 2006, 22-23）。「意見は、それが権威によって是認されているとき、昔の書物によって述べられ支持されているときに蓋然的である」（Hacking 2006, 30）といわれたのであり、蓋然性は「証言 *testimony*」や「権威 *authority*」にかかわる事柄だったのである。そして、この意味での「蓋然的」の用法は18世紀のイギリスでも保持されており、たとえば『ローマ帝国衰亡史』の著者ギボンが、ハンニバルのアルプス越えの地点について古代ローマの歴史家が述べた説について「そのような事実は蓋然的 *probable* ではあるが明らかに偽 *false* である」（Hacking 2006, 19）と述べている。

さて、近代的な意味での蓋然性は、「証拠 *evidence*」の概念、すなわち「証言の証拠」とは区別された「事物の証拠」の概念とともに、換言すれば、権威者の証言に基づいてではなく、事物が提供する証拠に基づいて意見を支持するという考え方とともに成立した。しかし、証拠の前身となる概念はルネサンス期にすでに存在していた。それは、しるしである。「しるし *signum, sign*」は、「原因 *causa, cause*」と対をなす概念で、前者は現象世界に属する事柄、後者は実在世界に属する事柄として区別されていた。この区別は、知識と意見の区別、またそれぞれの領域を探究した人々の区別にも重なるものであった。一方で、知識の領域である実在世界を対象として原因を探究した人々がいて、彼らは、天文学、光学、力学などの「高級科学 *high science*」の担い手たちであった。他方で、意見の領域である現象世界を対象としてしるしを探究した人々がいて、彼らは、占星術、錬金術、医学などの「低級科学 *low science*」

の担い手（経験家）たちだったのである。たとえば医者たちは、患者が「瀕死の状態にあることのしるし」（Hacking 2006, 28）や、「感染症［ペスト］の到来を事前に告げるしるし」や「感染症がすでに広がっていることを示すしるし」（ibid.）について語っている。このとき彼らがしていたことは、実質的には、意見を支持する事物の証拠を見出すことだったのであり、これが近代的な意味での蓋然性の成立を準備したのである。

ただルネサンス期には、しるしは、証言や権威に関する事柄と考えられており、蓋然性も依然として中世的な意味で理解されていた。しるしは、人の証言ではないがやはり証言、すなわち自然の証言、あるいは創造主である神の証言であり、それを見出すことは、神が著した書物（真の書物）を読むことであった。したがって、しるしは、それが神という究極の権威の証言であるがゆえに蓋然性をもつと認められたのである。

またルネサンス期には、自然の事象も、人間の言語も同じしるしと見なされて区別されていなかった。たとえばパラケルススにとっては、枝分かれした牡鹿の角先の数はその年齢のしるしであるのと同様、星の名前もまたしるしであった。彼は、水銀が梅毒の治療薬となることを知っていたが、それはつぎのような考え方に基づいていたのである。「梅毒に罹る場所つまり市場は、梅毒のしるしである。惑星の水星 Mercury［という名前］は、市場のしるしとして使われてきた。それゆえ、それと同じ名前をもつ金属の水銀 mercury は梅毒の治療薬である」（Hacking 2006, 42）。ところが、17世紀になると、しるしに「自然的」と「随意的」の区別が導入され、随意的なしるしとは区別された自然的なしるしが、とくに証拠（事物の証拠）の意味で理解されるようになる。こうして近代的な意味での蓋然性の成立に向けての歩みが始まったのである。証拠の意味でのしるしについて語っているのは、たとえばホップズである。^[8]

「類似の前件に続いて類似の後件が起こること、これをある人が非常にしばしば観察すると、その結果彼は、前件を見ればいつでも後件がまた起こると期待するし、後件を見れば類似の前件が起こったと考える。このとき彼は、前件と後件の両者を互いに他方のしるしと呼ぶことになる。たとえば、雲は未来の雨のしるしであり、雨は過去の雲のしるしであるというように。」（El, I.4.9）

「これらの「経験に基づく」しるしは、たんに推測的であるに過ぎない。つまり、しるしのもつ確かさは、それがこれまで外れた程度に応じて大きかったり小さかったりする。しかし、しるしが完全に明証的であることはけっしてない。ある人が昼と夜の交替をいままで絶えず見てきたのだとしても、そのことから彼は、これからもそうだろうと結論することも、永遠の昔からずっとそうだったと結論することもできないからである。経験は何事も普遍的に結論することがない。」（El, I.4.10）

後者の引用は、しるしに基づく推測は知識とはいえないこと、それは意見であり蓋然的であるに過ぎないことを述べたものと考えてよいだろう。^[9]

ところでヒュームは、「恒常的連接 constant conjunction」の経験、すなわち、Aタイプの事象に引き続いてBタイプの事象が生起するという事例を繰り返し経験することによってはじめて因果推論は可能になるとする一方で、その恒常的連接が今後も続く保証はない（自然の斉一性を合理的に基礎づけることはできない）と説いた。

「それゆえ、ある対象の存在から別の対象の存在を推論することは、ただ経験によってのみわれわれに可能となることである。……たとえばわれわれは、われわれが「炎」と呼ぶ種類の対象を見たこと、そして、われわれが「熱」と呼ぶ種類の感覚を感じたことを覚えている。われわれはまた、過去のすべ

ての事例において両者が恒常的に接続していたことも思い起こす。[このとき] われわれは、それ以上の形式を何ら踏むことなく、一方を「原因」他方を「結果」と呼んで、一方の存在から他方の存在を推論する。」(THN, 1.3.6.2)

「しかし、この経験はどうして未来にまで、そして、われわれが知るかぎりただ見かけ上類似しているだけかも知れない別の対象にまで拡張されるべきであるのか。……私がかつて食べたパンは、私の栄養となった。……しかし、別のパンもまた異なるときに私の栄養となるに違いない……ということになるだろうか。こうした帰結は、まったく必然的でないように思われる。」(EHU, 4.16)

ここでさきに引用したホッブズの発言を振り返ってみると、そこにはヒュームを先取りする見解が表明されているように見える。しかし、関連する概念の扱い方に関して、二人のあいだには決定的な違いがある。すでに述べたように、しるしは、意見ないし蓋然性の領域に属する事柄として、知識の領域に属する事柄である原因と区別されていた。しるしについてのホッブズの見方もこうした概念配置を踏まえたものである。それに対してヒュームは、因果関係を知識の事柄ではなく、蓋然性の事柄として論じたのだから、彼は原因を、知識の領域から蓋然性の領域、したがって意見の領域へと移し替えていると考えられる。彼の因果論は、知識論の概念配置の転換を図るものであり、たしかに知識論の「大変革」を目指すものだったのである。

3. 必然的結合と力能 — 知識論から形而上学へ

ヒュームの因果論に特徴的なのは、彼が因果関係と因果推論とのあいだに密接な関係を認め、因果推論についての考察を梃として因果関係の解明を行っていることである。彼が因果関係の核心と見なす「必然的結合 necessary connection」の解明もそうした考察方法の成果である。

因果関係が知識の事柄であるとすれば、原因と結果のあいだの結びつきは必然的であることになる。ところが、因果関係を蓋然性の事柄として扱うヒュームは、原因と結果のあいだの必然的結合を、対象世界に客観的に成立している事態とは見なさず、それをつぎのように説明する。二種類の事象が恒常的に接続し、反復して生起することを経験すれば、われわれは「一方を「原因」他方を「結果」と呼んで、一方の存在から他方の存在を推論する」(THN, 1.3.6.2)。しかし恒常的接続は、類似の事例（数的には異なるが、質的には同じ事例）の反復生起でしかない。つまり、その生起が何度繰り返されても、初回の生起を別にすれば、それまでにない何か新たな（質的に異なる）事態が対象世界に生じるわけではない。ところが、恒常的接続を「経験」すれば、つまり類似の事例の生起を何度も繰り返し「経験」すれば、ある大きな変化がわれわれの精神に生じる。

「頻繁な反復のあとでは、私はつぎのことを見出す。それは、一方の対象があらわれたとき、精神は、習慣によって決定されて、その対象にいつもともなっていた対象のことを考えるように、またその対象を、それが最初にあらわれた対象に対して有する関係のゆえに、より強い光のもとで考えるように決定されることである。とすれば、この印象つまり「決定」こそが、私に必然性の観念を与えるのである。」(THN, 1.3.14.1)

簡潔に言えば、「必然性は、対象のうちではなく精神のうちに存在するものである」(THN, 1.3.14.22) というわけである。こうしたヒュームの見解が、カントの思考を大いに刺激したことは周知のとおりである。

さて、必然的結合は「精神の決定 the determination of the mind」(THN, 1.3.14.23, and passim)に存するという結論に至るまでの考察を総括してヒュームは、つぎのように述べて読者の注意を喚起している。

「私がたったいま検討し終えたのは哲学のもっとも高尚な問いの一つ、すなわち「原因がもつ力能と効力に関する問い」であり、それは諸学のすべてにとって大きな関心の的であるように思われる。」(THN, 1.3.14.2)

「原因がもつ効力に関する問い、すなわち原因に結果を後続させる性質に関する問いほど、古代の哲学者たちのあいだでも当代の哲学者たちのあいだでも、その重要性和難しさのために多くの論争を引き起こした問いはない。」(THN, 1.3.14.3)

因果推論の問題を論じることを通じて彼が取り組んできたことは、同時に、原因がもつ「力能 power」ないし「効力 efficacy」をめぐる哲学の重大問題を論じることであったというのである。^[10] 因果推論が知識論の問題であったのに対して、これは形而上学の問題といってよいだろう。とすれば、ヒュームの因果論は知識論の「大変革」だけでなく、同時に形而上学の「大変革」も目指すものであったということになる。ヒュームの因果論がもつこの側面は、ハッキングの研究が十分な光を当てていない側面でもある。そこで、節をあらためてこの問題を論じることにしよう。

4. 形而上学の「大変革」

ヒュームの因果論は、いかなる意味で形而上学の「大変革」であったのか。この点を明らかにするため、彼が批判の標的とした見解が何であったのかを明確にするという仕方で考察を進めることにする。はじめに、これに関係するヒューム自身の発言を見てみよう。

「原因がもつ効力ないし活動力が位置づけられるのは、原因それ自体のうちにでも、神のうちにでも、はたまたこれら二つの原理の協働のうちにでもない。それは、もっぱら精神に、すなわち、過去のすべての事例において二つまたはそれ以上の対象が合一していたことを考える魂に属するのである。」(THN, 1.3.14.23)

「原因それ自体」というのは、通常原因と見なされる事物（対象世界の事象）のことであり、キリスト教の神との対比でいえば被造物のことである。またすぐあとで見るように、原因それ自体が原因としての効力ないし力能をもつとする第一の見解はアリストテレス主義のものであるから、「原因それ自体」というのは、アリストテレスに立ち戻っていえば実体（それ自身に固有な本質をもち、独立自存する事物）のことである。そして、神と被造物との「協働 concurrence」という観点から原因のもつ力能を捉える第三の見解は、キリスト教とアリストテレス主義の総合を図ったスコラ学者のものである。それに対して、神のみが原因としての力能をもつとする第二の見解は、スコラのアリストテレス主義を批判したデカルトならびにデカルト派の哲学者たち、とりわけマルブランシュの見解である。

以上三つの見解を、第一、第三、第二の見解の順番で少し詳しく見ていくことにする。

アリストテレスは、事物を「質料」と「形相」の統合体として捉えた。一般に事物は、それが何からできているかという素材の側面と、それが何であるかという本質の側面から見るができる。前者の「何」に対応するのが質料、後者の「何」に対応するのが形相である。すなわち、形相とは、ある事物

を当のものたらしめる本質規定であり、質料とは、その規定を受けて当のものとなる未規定のものである。そしてアリストテレスは、事物の変化も、この質料・形相の枠組みでもってつぎのように説明する。すなわち、事物の変化とは、質料のうちに形相が可能性として潜んでいた状態（可能態）から、形相があらわになり、可能性が現実となった状態（現実態）への移行だというのである。

こうした思想を基盤として成立したのが、アリストテレス主義の自然学である。そこでは、地球を中心として一定の秩序をもって完結している全体という世界像のもとで、諸事物は、それぞれに固有の一定の本質を有する実体として捉えられ、個々の現象は、それが属する実体の本質ないし本性を持ち出すことによって説明された。たとえば石が落下するのは、石（一般に土の元素から構成されている事物）が、それが本来占める場所である世界の中心、つまり下方へと向かう本性を有するからである。換言すれば、石は下方に向かう運動の原理（原因）を、それ自体にうちに、その形相的本質として有する。そして、その本質の現実化のプロセスとして落下運動が生起すること、これが、原因それ自体がもつ能力が発揮されるということなのである。

以上が第一の見解であるが、それはアリストテレス主義者であるかぎりでのスコラ学者の見解でもあった。しかし、スコラ学者にとっての課題は、むしろアリストテレス主義の自然学をキリスト教神学と整合的なものとして捉え直すことにあった。全能なる神は、一切の力能の唯一の源泉である。このことは、原因それ自体つまり被造物が力能をもつとする第一の見解といかにして両立しうるのである。この疑問に対する解答としてスコラ学者がとったのが「協働原因論 concurrentism」と呼ばれる第三の見解である。^[1] それは、事象の生起を「一次的原因」である神と、「二次的原因」である被造物とが協働して力能を発揮した結果と見なすもので、たとえばトマスは『対異教徒大全』においてつぎのように述べる。

「結果の秩序は、原因の秩序と照応する。さて、すべての結果のうちで第一のものは存在である。その他すべての結果は存在の限定なのだからである。それゆえ、存在は一次的作動者がもたらすそれに固有の結果であり、その他すべての作動者がそれを生み出すのは、一次的作動者の力能を介することによってである。さらにいえば、二次的作動者は、一次的作動者の作用をいわば個別化し限定するものであり、存在を限定するその他の完全性をそれに固有の結果として生み出す。」（cited in Ott 2009, 21）

結果として生起する事象は多様であるが、それらはどれも存在であるという点では変わりがない。逆にいえば、結果として生起する事象はどれも存在であるが、存在がさまざまな仕方限定されたものとして多様である。そこでトマスは、同一の結果について、それが存在であるかぎりでは、その原因を神（一次的作動者）に帰し、それが多様であるかぎりでは、その原因を被造物（二次的作動者）に帰するという仕方原因を振り分け、前者（一次的原因）と後者（二次的原因）の協働によって結果が生起すると見なしたのである。

トマスがこのような立場をとるのは、神は不易であり一様である以上、結果が示す多様性の原因を神に帰することはできないと彼が考えたからである。しかし、神こそが力能の唯一の源泉であるとする以上、被造物はどのようにして原因としての力能を、たとえそれが二次的なものであれもちうるのか、という疑問が残る。そして、この点を突いたのがデカルト派の哲学者たちであり、彼らは、神のみが原因としての力能をもつとする第二の見解を唱えたのである。

アリストテレス主義の哲学によれば、物体は、質料（物質）的原理とは別に形相的原理（実体形相などと呼ばれる）をその本質として有し、それによって原因として力能を発揮する。これに対して、物体の本質を延長と捉え、物体を物質の空間的広がりにはかならないと見なしたデカルト派の哲学者たちは、物体から原因としての力能を剥奪した。さらに彼らは、精神（神の精神を除く有限な精神）からも原因

としての力能を剥奪して、神のみが原因としての力能をもつとしたのである。こうした方向の議論を展開したのはたとえばマルブランシュであるが、原因やその力能を論じてアリストテレス主義を退けると、オラトリオ修道会の司祭であった彼の場合には宗教的な動機が強く働いていた。

キリスト教は、「ただ神のみしか愛してはならないし恐れてはならない」(RV, 6.2.3.319) と教えているが、それは、神が、そして神のみが原因としてわれわれの幸福を左右する力能をもつからである。ところが、アリストテレス主義の哲学によれば、物体のような被造物も原因としての力能をもつとされる。とすればわれわれは、被造物にも、少なくともそれがわれわれの幸福を左右する程度に応じて神性を認め、そしてそれを愛し、あるいは恐れなければならないことになる。つまり、アリストテレス主義の哲学は、キリスト教に反する教えへとわれわれを導くという意味で「もっとも危険な誤り」(RV, 6.2.3, title) を犯すものである。それは「卑しむべき哲学」(RV, 6.2.3.312) なのであって、そのような哲学は断じて受け容れることができないというわけである。

そこでマルブランシュは「機会原因論 occasionalism」と呼ばれるつぎのような立場をとる。

「真の神はひとりしかいないのだから、真の原因は一つしかない。各々の事物がもつ自然ないし力は、神の意志でしかない。自然的原因はすべて真の原因ではなく、ただ機会原因であるにすぎない。」(RV, 6.2.3.312)

真の原因として力能をもつのはただ神のみであり、自然的原因（結果に先行して生起する、通常原因と見なされている事象）は、結果が生起する「きっかけ」すなわち「機会原因 cause occasionnelle」に過ぎないというのである。

さてヒュームは、本節の冒頭で見たように、以上三つのいずれの見解も退けて第四の見解を提唱する。原因としての力能をもつのは、被造物（物体や精神）でもなければ神でもないし、神と被造物が協働して原因としての力能を発揮するのでもない。原因のもつ力能ということがおよそ理解可能な何かであるとすれば、それは、二つの事象のあいだに因果関係を認めるわれわれの精神のうちに位置づけられるものでなければならないというのである。これはもちろん、被造物である精神に原因としての力能を認めるという話ではない。実際ヒュームは、精神ないし意志が原因として力能を発揮する可能性を否定している (THN, 1.3.14.12)。そうではなくてヒュームは、被造物であれ、神であれ、原因として力能を発揮するとこれまで見なされてきた対象のうちにではなく、二種類の事象間の恒常的接続の経験に基づいて因果推論を行うという仕方に対象世界に因果関係を設定するわれわれ人間の精神のうちに、原因がもつ力能を見出しているのである。このように従来とはまったく異なる視点から原因の力能にアプローチしているという意味で、ヒュームの因果論は形而上学の「大変革」を目指すものだったのである。

しかし、こうした「大変革」は先人の仕事に依拠しつつ、とりわけマルブランシュによるアリストテレス主義批判の路線を受け継ぐという仕方でも成し遂げられたものであることを見逃してはならない。^[12] 「ヒュームは、因果性について著述したとき『真理探究論』を念頭に置いてだけでなく、著述中にそれを開いて参照することさえあった」(McCracken 1983, 258) といわれるように、マルブランシュの影響は随所に表れている。たとえば『本性論』には、ヒュームがマルブランシュへの参照を指示している段落があって、そこにはマルブランシュが『解明』で述べていることのほぼ引き写しと目される一文が含まれている。^[13] したがって、ヒュームが成し遂げたと称する形而上学の「大変革」の成否や意義について考えるためには、マルブランシュとの比較検討の作業が欠かせない。

また、本稿では取り上げることができなかったが、ヒュームは「二次的原因の効力を主張し、物質に派生的ではあるが実在的な力能と活動力を帰属させる人々の仮説」(THN, 1.3.14.11) も退けている。

これは、近代においてなおアリストテレス主義の見解（第一の見解）に力能に関する考察の足場を求めたロックらの主張を指している。したがって、マルブランシュのアリストテレス主義批判との比較という観点からヒュームを読もうとすれば、アリストテレス主義を継承したロックとの比較という観点からの検討も当然不可欠のこととなる。そしてこれらの作業は、ヒュームの因果論がもつ知識論の「大変革」としての側面にもあらためて目を向けることを促すだろう。

このように残された課題はなお多くしかも大きい。しかし、いまは今後の研究の方向性を見通す地点まで到達したことを確認してひとまず筆をおく。

【注】

- [1] ヒュームが生まれたのは1711年4月26日（ユリウス暦）、『本性論』第1巻・第2巻の出版は1739年1月であるから、そのときヒュームは27歳であった。ちなみに『本性論』は三巻本で、第3巻は1740年10月に出版された。
- [2] 1739年2月13日付、ヘンリー・ヒューム宛。
- [3] 『摘要』の表題は、省略せずに全体を示せば、『人間本性等々についての論考』と題して最近公刊された書物の摘要、そこでは同書の主要な議論が例解され、説明される』である。それは1739年中にはほぼ完成し、1740年3月に出版された。ちなみに『摘要』は、匿名の著者が第三者の立場から『本性論』を解説するというスタイルで書かれている。したがって、つぎに本文中で引用する箇所に見られるように、ヒューム自身が行った解明が「彼が行った解明」などと三人称で表現される。
- [4] 「観念間の関係」ならびに「事実」という表現は『本性論』でも用いられるが、対概念としての使用が定着するのは『人間知性研究』においてである。
- [5] ヒュームは、別の箇所では蓋然性の領域を「確証 proof」と狭義の「蓋然性」（確率の意味に近いそれ）に二分して、「知識」「確証」「蓋然性（確率）」の三分法を採用している（THN, 1.3.11.2）。「確証」が得られるのは、恒常的接続が例外なく成立する場合、「蓋然性（確率）」しか得られないのは、恒常的接続の成立に例外がある場合である。「恒常的接続」については第3節を参照。
- [6] ハッキングの研究は、蓋然性 probability の意味の変遷を辿りながら、確率 probability 概念の成立過程を解明しようとするものである。
- [7] ホッブズとヒュームの異同という論点を明確化したことを別にすれば、以下本節で述べることは、ハッキングの著書の関連箇所の要約である。
- [8] ホッブズ自身は、evidence をデカルト的な「明証性」の意味で用いており、「証拠」の意味で用いているわけではない。本文中の引用箇所にある「明証的」の原語は evident である。
- [9] 「意見」および「蓋然性」に関するホッブズの見解については、以下の発言を参照。
「誤謬推論によって、あるいは他者への信頼に基づいてわれわれが真と承認する命題はすべて、蓋然的であるとわれわれは考える。そして、そのような命題はすべて信頼か誤謬によって承認されるのであるから、われわれはそれらの命題を知っているとはいわれず、真と考えているといわれる。そして、それらの承認は 意見 と呼ばれる。」（El, I.6.6）
- [10] ヒュームは、因果論の冒頭ですでに「因果関係」を「ある対象が別の対象を生み出す力能」（THN, 1.3.1.1）と説明している。これは、ヒュームが形而上学の問題をはじめから視野に収めていたことを示している。
- [11] 協働原因論については、Ott 2009, 20–27 を参照。
- [12] この点については、ごく簡単にではあるが論じたことがある。秋元 2013, 81–93 を参照。
- [13] 「二次的原因は、その質料によって、つまりその外形と運動によって作用すると主張する哲学者がいるが、彼らはある意味で正しい。別の人々は「実体形相」によって作用すると主張する。何人かの人々は「偶有性」あるいは「性質」によって、ある人々は「質料」と「形相」によってと主張する。またある者は「形相」と「偶有性」によって、ある者は以上のどれとも区別されるある種の「力」ないし「能力」によってと主張する。」（Ecl, 15, 205）

「物体は、その実体形相によって作用すると主張する人々がいる。別の人々は偶有性あるいは性質によって、何人かの人々は質料と形相によって作用すると主張する。またある人々は形相と偶有性によって、別の人々は以上のどれとも異なるある種の力や能力によってと主張する。」(THN, 1.3.14.7)

「二次的原因」への言及が示すように、マルブランシュは、アリストテレス主義の諸類型について語っている。

【一次文献】

Hobbes, Thomas

—1969 *The Elements of Law, Natural and Politic*, edited with a Preface and Critical Notes by Ferdinand Tönnies, 2nd edition. London: Franc Cass and Company Limited. [El]

Hume, David

—1954 *New Letters of David Hume*, edited by Raymond Kilbansky and Ernst C. Mossner. New York: Oxford University Press. [New Letters]

—2000 *An Enquiry concerning Human Understanding*, A Critical edition, edited by Tom L. Beauchamp. Oxford: Clarendon Press. [EHU]

—2011 a *A Treatise of Human Nature*, A Critical edition, edited by David Fate Norton and Mary J. Norton. Oxford: Clarendon Press. [THN]

—2011 b *An Abstract ... of A Treatise of Human Nature*, in Hume 2011 a. [Abs]

Malebranche, Nicolas

—1997 *The Search after Truth*, translated and edited by Thomas M. Lennon and Paul J. Olscamp. Cambridge: Cambridge University Press.

—2006 *De la recherche de la vérité*, Présentation, édition et notes par Jean-Christophe Bardout. Paris: Vrin. [RV]

—2006 *Éclaircissements sur la recherche de la vérité*, Présentation, édition et notes par Jean-Christophe Bardout. Paris: Vrin. [Ecl]

各著作への参照指示は、文献表に記した略号を用いて行った。略号に続く数字は、ホッブズおよびヒュームの著作の場合は、巻・部・章・節・段落等の番号である。またマルブランシュの著作の場合は、巻・部・章等の番号および Vrin 社発行の全集版のページ番号である。

【二次文献】

Hacking, Ian

—2006 *The Emergence of Probability: A Philosophical Study of Early Ideas about Probability, Induction and Statistical Inference*. Cambridge: Cambridge University Press.

McCracken, Charles J.

—1983 *Malebranche and British Philosophy*. Oxford: Clarendon Press.

Ott, Walter

—2009 *Causation and Laws of Nature in Early Modern Philosophy*. New York: Oxford University Press.

秋元ひろと（編）

—2013 『因果の探究』三重大学出版会

本稿は、科学研究補助金（基盤研究（c）、課題番号 25370014）の研究成果の一部である。